

卒業論文 これからの日本における NPO の重要性を考える

- 地域に根ざした住民主体の NPO に注目して -

多摩大学梅澤ホームゼミナール 4 年 荒井浩樹

1. 研究の動機

私は元々ボランティアやソーシャルな活動に興味があったことから梅澤ゼミに所属し、複数の NPO 団体、市民の方々と協力して様々な活動を行った。ゼミの 3 年間の活動を通じて、多世代交流の重要性、生活者が自ら自分の暮らす地域に関わることの重要性について多くの事を学ばせていただいた。一緒に活動する中で、今日、日本では NPO が重要な役割を果たしていることを改めて実感する一方で NPO の地道な活動が地域の方々に理解されていないのではないかと、正しく認識されていないのではないかと考えるようになった。本研究は 3 年間の地域活動の総括として、改めて日本における NPO の社会的役割や課題についてまとめ、特に地域に根差した NPO の事例を取り上げ、その重要性について考察するものである。

2. 本論文における NPO の概念、現状と課題

NPO については、狭義・広義の捉え方がなされている。狭義には特定非営利活動促進法に基づき法人格を有する団体を指すが、ここでは法人格の有無にかかわらず地域、社会の問題に対して不特定多数の利益のために人々が自発的につくったボランティア団体や市民活動団体を含める広義の捉え方をとる。

NPO は公益の実現を目的とする担い手として、また新たな経済主体として期待されている。しかし現状では、活動が無償で提供するものと考えられてしまうこと、経済的に不安定な団体が多く人手、認知・信頼度不足などが負のスパイラルになっている。原因は NPO 自体の社会的認知度が低いこと、欧米の寄付の文化がないことや助成金頼みの運営から経済的に安定しない事、特に若者世代からの興味・関心が薄いことが考えられる。これらを改善するには、社会的な認知度を高め、NPO を正しく認識してもらう必要がある。そして信頼性の高い安定的運営を継続し続ける必要があるだろう。

3. NPO の存在意義

NPO は重要な役割を担ってはいるが、それらの役割は

企業のフィランソロピーや政府が行えばよいという声もある。そこで NPO 独自の存在意義について述べ、企業や政府との違いについて考える。企業は利益を求めることから万人受けする活動を支援する傾向にある。広く承認されにくい活動には資金援助が行きにくい。政府や行政は公平性を重視するため、個別の問題に注力できないという問題がある。つまりこれらの体制には賄えない問題が存在するのだ。NPO は非営利として、また特定の問題に注力もできるので、企業や行政が対応しない、出来ない問題に対応することが出来る。

4. 地域に根差した NPO の事例と比較

研究では、「川越スカラ座」、「フローレンス」、そして私自身が梅澤ゼミでお世話になった「一本杉公園みどりの会」の 3 つ事例を取上げて比較検討し、発展へのポイントを調べた。3 つの事例にはいくつかの共通点が存在する。「地域密着」また「ニーズに答える」という点だ。川越スカラ座は昔から地域の人々に愛されながら映画館としての役割が無くなる中、経営難により閉館。しかし地元の方々の活動により同年に NPO として再生した。新たな運営には地元の方々の協力とその還元を行い、そして町中の居場所づくりをモットーとして地域に根差した、大型のシネマと違った活動をしている。フローレンスは、現在は大規模展開する NPO であるが、駒崎氏が一から始めた活動である。活動の基点は病児保育という一点の問題で地域密着の NPO である。一本杉公園みどりの会は、ニュータウン開発と共に設計され、維持管理が難しい多摩市のみどりを管理しながら現状を市民に知ってもらうための地道な活動を行っている。

5. 考察

NPO の認証数は年々増加にある。ソーシャルな活動がビジネスとして安定すれば、より住みやすい社会になる。NPO 側は豊かな経験と実績を持つ先駆者の創意工夫を共有し安定的運営を目指す、生活者は NPO の意義と理解を深め支援し続けることが重要であると考えられる。